

孤児にローマ字教育

福島で日本語の可能性探る



父の著作を手にする真理さん。「日本語を西洋の言葉に負けない言語にしたい」という大きな構想があった」と父の思いを語る

戦後占領期の日本で、日本語をローマ字で表記するべきだという「ローマ字論」が広がった。その教育実験の場が、福島市にあった。漢字という文字の束縛から日本語を解放し、音声を基盤とした、西洋の言葉に負けない言語にしたいという大きな構想があった。国語学者でローマ字教育研究者の三尾砂さんの長男真理さん(77)は、亡き父の思いを代弁する。

香川県志度町(現さぬき市)で1903年に生まれた砂さんは早稲田大卒業後、理想的な子どもの教育を追求め、児童心理学、子どもの言語発達などを研究した。そして終戦翌年の46年6月、自らの理想の教育を実現しようと福島市茂庭に青葉学園を創設。寄宿制の学園に戦災孤児を受け



青葉学園で子どもたちと夕食を共にした砂さん(右)

「親として育てたい」学園創設の原動力は「ローマ字教育の効果を実証したい」という学者としての情熱、そして孤児となった子どもたちを親として育てたいという思いだった。戦争が激化の一途をたどっていた45年4月、子どもたちが安全に暮らせる土地を探

入れ難い漢字ではなく、小さな子どもでも簡単に読むことができるローマ字教育を実践、日本語の可能性を広げようとした。

「親として育てたい」学園創設の原動力は「ローマ字教育の効果を実証したい」という学者としての情熱、そして孤児となった子どもたちを親として育てたいという思いだった。戦争が激化の一途をたどっていた45年4月、子どもたちが安全に暮らせる土地を探

入れ難い漢字ではなく、小さな子どもでも簡単に読むことができるローマ字教育を実践、日本語の可能性を広げようとした。

入れ難い漢字ではなく、小さな子どもでも簡単に読むことができるローマ字教育を実践、日本語の可能性を広げようとした。

入れ難い漢字ではなく、小さな子どもでも簡単に読むことができるローマ字教育を実践、日本語の可能性を広げようとした。

入れ難い漢字ではなく、小さな子どもでも簡単に読むことができるローマ字教育を実践、日本語の可能性を広げようとした。

▲10月1日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

調べてわかったこと、考えたこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

三尾砂さんの戦災孤児に対するローマ字教育と、親としての育てたいという思い、青葉学園のホームページも踏まえ、あなたの感じたことをまとめてみましょう。

